經濟研究

第9巻 第2號

April 1958 *Vol. 9 No. 2*

ヴェブレンとマルクス

小原敬士

アメリカが生んだ特異な思想家ソースタイン・ヴェブレン Thorstein B. Veblen (1857—1929) がひとりの偶像破壊主義者であり，社会主義的思想の持主であったことは疑いがない。*Monthly Review* 誌の編集者——おそらくポール・スウィージー——などは，ソースタイン・ヴェブレンをもって「合衆国がかって生み出した最も真正な社会主義者[1)]」であったとみなしている。リュイス・コーリー Lewis Corey に至っては「ソースタイン・ヴェブレンにおける最も重要なものはすべてマルクス主義や社会主義において達成されるかもしれない[2)]」と言っている。ヴェブレンはその思想形成の過程において，マルクスを含めての社会主義学説から多くの影響をうけたことは確かであり，また彼の社会思想——殊に晩年における思想——の中には，可なり急進的な社会主義思想ともみられるものが含まれていたことも疑いがない。しかしながら，ヴェブレンは決してマルクス主義者ではなかったし，彼の経済学や社会思想はマルクス主義のそれとは可なりいちじるしく異っていた。

それではヴェブレンは，どのような点でマルクス主義に接近し，それを摂取したか。また彼はどのような点で，マルクス主義を批判し，それから離反していたか。これらの点を明らかにすることは，ヴェブレンそのひとの経済社会思想の本質を把握する上に大切であるばかりでなく，およそアメリカの社会主義思想の特色を明らかにする上にも重要な意味をもつであろう。

1 マルクス主義の摂取

まずジョセフ・ドーフマン Joseph Dorfman 教授の詳細をきわめたヴェブレン評伝——*Thorstein Veblen and His America*, 1934.——によってヴェブレンの思想形成の跡を辿ってみると，われわれは彼が最初，哲学の研究からその学問的経歴を始めたことを見出す。彼は 17 歳のときに入学したカールトン・カレッジでは主として哲学，生物学，経済学を修め，その卒業論文は，ウイリアム・ハミルトン William Hamilton の哲学に関するものであった。1881 年には彼はジョンス・ホプキンス大学で行動主義の哲学者として知られたチャールス・パース Charles S. Pierce の講義をきいている。その後彼はイェール大学に転じ，1884 年同大学に Ph. D. 論文を提出したが，それは "Ethical Ground of a Doctrine of Retribution" と題

1) *Monthly Review*, July—August, 1957, p. 74.

2) Lewis Corey, "Veblen and Marxism", *Marxist Quarterly*, March, 1937.

するものであった。

しかしながら，Ph. D. をえた後のヴェブレンは次第にその学問的興味を経済学と社会主義に向けていったようにみえる。彼は1884年—1891年の間，ミネソタの田園に立てこもり，もっぱら読書と執筆の生活を送ったが，その間彼は経済学や社会主義に関する広汎な読書を行なったように思われる。彼がフェルディナンド・ラサルレをよみ，また1888年に結婚したエレン・ロルフ Ellen Rolfe とともに，エドマンド・ベラミーの著作について論議したことは，特にドーフマンが明記するところである。この時期のアメリカは，一方では資本主義的諸企業がすさまじい勢いで成長するとともに，他方ではいろいろな形の社会主義思想が立ち現われ，労働運動や農民運動が各地にまき起った時期であった。1882年にはスタンダード石油トラストが結成され，これに対してヘンリー・ロイドその他の muckrakers が独占排撃の鋭い論陣を張った。ヘンリー・ジョージの『進歩と貧困』(1879)やエドマンド・ベラミーの『回顧』(1888)などの社会主義的著作が各階層の間に多くの読者を獲得した。1886年には，シカゴにおいて，きわめて急進的な労働争議が起り，いわゆるヘイマーケット事件が発生した。ヨーロッパ大陸でも，社会主義と社会運動が全盛期に達していた。1885年には『資本論』第2巻が出版された。このような時期において鋭利な批判的精神の持主であるヴェブレンが社会主義の研究に目を向けたことはきわめて自然の成行である。彼が1891年に発表した論文 "Some Neglected Points in the Theory of Socialism" (*Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Nov., 1891.) は，スペンサー一派の社会主義並びに社会立法に対する反対論を批判し，産業の国有化を主張したものであるが，われわれはそこにヘンリー・ジョージの思想と相通ずる考え方が現われているのをみることができる。

ヴェブレンは7年間にわたる読書生活の後に，1892年シカゴ大学に職を得たが，同大学における彼の講義題目のひとつは社会主義論であった。その頃彼はマルクス，ゾムバルト，レスター・ウォードなどの著作に親しむことによって，ますます深く経済学や社会主義の研究にはいって行ったようにみえる。ヴェブレンは1895年，彼が編集の責にあった *Journal of Political Economy* の三月号に「覚書」と「書評」を執筆しているが，それは，マルクス主義経済学もしくは社会主義に関するヴェブレンの理解の程度を示すものとして重要な意義をもつものである。

「覚書」——それは無署名のものであるが，ドーフマン教授も指摘しているように，ヴェブレンの筆によるものであることは疑いの余地がない——は，その前年に出版された『資本論』第3巻に関するものであるが，そこでヴェブレンは特に剰余価値率と利潤率の関係に関するマルクスの見解に対して独特の批判的態度を示した。彼はいう。——『資本論』第3巻は，剰余価値学説の気取った構造は，その場限りの意味で (in Pickwickian sense) で解釈さるべきであるということを，ほとんど200ページを費して骨折って説明したものである。剰余価値率の理論を，利潤率の日常的な事実と調和させる必要が感じられていたが，そのような感じは，剰余価値理論を，それとは無関係なことに誤まって適用しようとする粗雑で無用な試みを基礎とするものである。剰余価値理論は，具体的事実——利潤率——に対してきわめて疎遠な漠然たる関係しかもたない。「剰余価値」と「利潤」との関係は精々のところ，あるときの，ある社会の総利潤は総剰余価値ともいえるということ位である。剰余価値率と利潤率との間には，なんら具体的な関係はない。その両者は全く独立に変動する。具体的な場合の，すなわち特定の産業乃至は企業の総利潤は，その産業乃至は企業においてつくり出される総剰余価値に依存するものでもなく，また額においてそれと一致するものでもない。剰余価値理論全体は，あらゆる有用な目的に対して，事実上無意味なガラクタ (meaningless lumber) である[3]，と。

つまり，ヴェブレンは利潤こそが具体的事実であって，剰余価値は単なる抽象概念であり，その

3) *Journal of Political Economy*, March, 1895, pp. 218—219.

両者の間にはなんら具体的な関連はないと考えるのであるが，われわれは，ここに資本主義体制の特色をいわゆる「営利的企業」(business enterprise)の貨殖的営利活動に即して捉えようとするヴェブレンの根本的態度をみることができるのである。

Journal of Political Economy の同じ号に載った Robert Flint, *Socialism*, 1894. の書評では，ヴェブレンはフリントにおける「資本」の概念の批判を通じて，マルクス主義の資本概念に対する適確な理解を示している。彼は次のようにいう。——フリントは「社会主義と労働」の章では資本に関するマルクスの定義をかなり正しく記述している。すなわち，そこでは「資本」は「私有財産として保有せられ，雇用労働を手段として利潤を造出するために用いられる生産財」として理解されている。しかるに，「社会主義と資本」の章において「社会主義者の資本に対する根拠なき敵意」について語る場合には，彼〔フリント〕はこのような歴史的範疇としての資本の特殊な社会主義的概念を忘れてしまい，社会主義者の資本に対する敵意を，単に生産手段に対する敵意という意味に解してしまう。このように資本に関する社会主義的概念と現在流行の概念との区別を一貫的に保持することができなかったことが，この章全体を台なしにしている，と[4]。

これは明らかに，マルクス主義的資本概念の正しい理解を示すものであるが，このような観念こそは，vested interest, absentee ownership などのヴェブレン独特の概念の基礎となったものであった。

1899 年に出版され，忽ちヴェレンの文名を高からしめた *The Theory of Leisure Class* もその根底には明らかにマルクス主義的思考方法が横たわっていた。彼はこの書物において，先史社会を原始共有制の社会とみなし，その中から私有財産制と階級分化が発展する過程を明らかにし，最後に営利的企業の成立とか，資本家がその富をデモンストレイトする方法としての conspicuous consumption, pecuniary emulation といったような社会現象を説明した。また彼は営利的企業が単に過渡的性格のものであることを指摘した。「人類は再度の身分制度や暗黒時代か，それでなければ，産業的社会や機械的技術の十分な発展かのいずれかに直面している。」「この対立的要因のいずれかがより強くなるかは臆測の域を出ないけれども，いずれの場合においても営利的企業は過渡的な出来事であって，ひとつの生物学的な造化の戯れ(a biological sport)にすぎない。」このような考え方は多分にマルクス主義的な考え方に相通ずるものをもっている。だからこそ，Robert Rives La Monte は，この書物を評して「有閑階級の理論は共産党宣言以来の社会主義思想における最も重要な貢献である。……しかし，ヴェブレンの最良の著作はマルクスの註釈以上の何ものでもない[5]」と言ったのである。

2　マルクス主義の批判

このような過程を経てますます深く社会主義学説の研究に没頭したヴェブレンは，1906—7 年，"The Socialist Economics of Karl Marx and his Followers" を *Quarterly Journal of Economics*, Aug., 1906, Feb., 1907.[6]に発表したが，それは「15年に亘り社会主義の講義を行ない，その術語で思索したことの成果」(J. Dorfman)であるとともに，マルクス主義経済学に対する彼自身の立場を最も明確に示したものであった。ヴェブレンはこの労作において，マルクス主義経済学に関する理解と造詣を遺憾なく示すとともに，それに対する独特な批判をはっきりと打ち出した。

この論文においてヴェブレンはまずマルクスの業績に対する高き評価を表明している。「その体系全体は，人類文化のどの様相をとり扱った科学の中にもめったにぶつからないような独創性と創意の雰囲気をもっている。」つづいて彼は，マルクス思想の 2 つの源流——(1)イギリス的自然権(natural right)と，(2)新ヘーゲル主義乃至は唯

4)　*Ibid.*, pp. 250—251.

5)　J. Dorfman, *Thorstein Veblen and His America*, 1934. p. 238.

6)　この論文は，いまは *The Place of Science in Modern Civilisation, and Other Essays*, 1919. に収録されている。

物論的ヘーゲル主義——について論じる。マルクスの社会主義的 propaganda の中心となっている理論——労働価値説，労働搾取理論，労働者の全生産物に対する要求の理論(労働全収権)——はすべてイギリス的自然権乃至は自然的自由の思想にもとずくものである，とヴェブレンは解する。しかし，歴史過程において，これらの社会主義的理想を実現することについてのマルクスの理論はヘーゲル的な発展の形而上学の上にうち建てられる。マルクスの包括的な体系はすべて唯物史観に立脚している。そしてヘーゲル的唯物論が正統的ヘーゲル主義と異るのは，論理的継起を顚倒せしめた点にある。ヘーゲルは「思惟は存在である」といったが，マルクスは「存在が思惟を決定する」という。しかし，いずれの場合においても，理論的定式化の支配的規範となっているものは，運動，発展，進化，進歩の概念であり，また，そのような運動はいずれの場合においても闘争の方法によって必然的に生起するという考え方である。ヘーゲルにおいては，それは3段階の弁証法的過程による精神の自己実現のための闘争であり，マルクスの場合においては，それは階級闘争である。

これはもちろんマルクス主義の根本思想のほぼ正しい理解であるけれども，しかしヴェブレン自身は，新ヘーゲル主義とも唯物史観とも別の立場に立っている。彼はマルクスの階級闘争理論とその基底に横たわるヘーゲル主義とを次のように批判する。

階級闘争はマルクスの場合においては「物質的」なものと考えられるが，この場合の「物質的」という言葉は比喩的な意味につかわれているのであり，それは機械的，物理的もしくは生理学的なものを意味するのではなく経済的なものを意味するにすぎない。それは物質的生活手段のための諸階級間の闘争であるという意味において物質的なのである。「歴史の唯物的概念は，生産並びに，生産に次いでその生産物の交換があらゆる社会秩序の基礎であるという原理の上に進行する，」(エンゲルス)社会秩序は階級闘争を通じて形成されるのであり，社会発展の一定の段階における階級闘争の性格は「そのときの経済的生産並びに分配の様式」によって決定される。

それゆえに社会進歩の弁証法的運動は，生ま生ましい創造の発展過程がその上に展開されるところの機械的，生理学的緊張の文字通り物質的な平面においてではなく，人間の慾望や衝動の精神的な平面において動く。それは，意識的な人間精神の有力な存在によって純化された唯物論である。しかしそれは，生活手段の生産という物質的事実によって制約されている。社会生活の展開過程に含まれる窮極の能動的諸力は，生産機構に携わっている物質的営力であるが，しかしその過程の弁証法——階級闘争——は，産業の物質的生産物の評価に参画している人間意識の第2次的諸力の中においてのみ，またそれを基準としてのみ自己の進路を辿る。終始一貫して唯物論的な概念，すなわち発展過程の唯物論的な解釈に終始一貫して固着している概念は，その仮定的な弁証法的闘争を，生ま生ましい物質的諸力の無意識的無関心的な摩擦たらしめることを避けることができない。これは，意識的階級闘争の概念に頼ることなしに，不伝導性の因果関係を基準とする解釈に達するであろうし，またそれは，自然淘汰という非目的論的なダーウィン的概念に近い進化の概念に導くであろう。それは，社会進歩のひとつの不可欠の方法としての意識的階級闘争のマルクス主義的観念に導くはずはない。その代りにそれは，ダーウィニズムの場合と同じように，社会の構造と機能の累積的変化の過程の概念に導くであろうが，このような過程は本質的に因果関係の累積的継起であり，不伝導性のもの，非目的論的なものであるから，敬虔な空想力を加えないかぎり，退化と区別される進歩を含み，もしくは人間精神の「自己実現」に向うものとはいうことができない。またそれは，ひとつの到達点，すなわち，あらゆる過程の線がそこに集まり，それを越えては過程は進行しないような目標に導くということもできない。マルクス主義の階級闘争過程の目標はそのようなものであり，その場合，社会主義的到達点の無階級的経済構造では階級闘争は消滅すると考えられるのであるが，ダーウィニズムにおいては，そのような到達点はなく，決定的な均衡もない。

ヴェブレンは以上のような彼独特のかなり晦渋な理論をもって，ダーウィン主義的社会進化論を基礎としてマルクス主義の史的唯物論を批判するのであるが，その考え方は，彼の次のような言葉の中に要約的に示されている[7]。

「新ヘーゲル主義的浪漫主義的なマルクス主義の立場は全く人間性であったが，一方，進化論的——それはダーウィン主義的ともいえる——な立場は全く非人間性的である。……浪漫主義的(マルクス主義的)な理論の継起は本質的に知性的継起であり，したがってそれは目的論的性格のものである。その論理的帰趨は終りまで論じつくすことができる。つまり，それはある目標に向っている。これに反して，ダーウィン主義的な考え方においては，諸事実の中に求められ，それに帰属せしめられる連続性は因果の連続性である。……その継起は，生ま生ましい因果関係の背後の力(vis a tergo)そのものによって支配せられ，したがって本来機械的なものである。発展の新ヘーゲル主義的マルクス主義的体系は相闘争する野心的な人間精神の形象によってつくり出される。ダーウィン主義的進化の体系は機械的過程の性格のものである。」

このようにヴェブレンはマルクスの唯物論的歴史哲学については多分に批判的であるけれども，その歴史哲学の枠内において展開されているマルクスの経済学的諸理論，例えば労働価値論，剰余価値論，剰余価値から生ずる資本蓄積の理論，蓄積と同時に発生する「産業予備軍」の理論，そして最後に資本主義崩壊の理論等については十分に適確な理解をもってそれを叙述している。例えば，生産物と賃銀の乖離，それから導かれる過少消費と過剰生産，資本主義の崩壊等について，ヴェブレンは次のようにかいている[8]。

「一方における資本並びに生産物の額と他方における賃銀として労働者が受けとる額との間のこのような乖離は，可なり重要な附随的結果をもつ。賃銀によって代表される労働者の購買力は，消費財に対する需要の最大の部分であるし，またそれと同時に，ことの性質上，生産物の購買に対してますます不十分となるものであるから……．その結果として，市場はますます過剰生産によって飽満となり，したがって商業恐慌や不況をうけ易くなる。恰かもマルクスの立場からの直接の推論であるかのように，次のことが論ぜられてきた。つまり，労働者がその労働の全生産物を獲得しないことに基く生産と市場とのこのような悪調整が直接に資本主義体制の崩壊に導き，したがって，それ自身の力で社会主義的完成をもたらすというのである。しかしながら，恐慌や不況は社会主義に導くような発展過程において重要な役割を演ずるけれども，それはマルクスの立場ではない。マルクス理論においては，社会主義は無産労働者の側における意識的階級闘争の道によって到来するのであり，労働者は彼ら自身の利害関係によって意識的に行動し，彼ら自身の利益のために革命運動を推しすすめるのである。しかし，恐慌や不況は，労働者を駆って，そのような運動に適した精神状態に至らしめるのに大きな役割をもつであろう。」

もっとも，資本主義的生産様式の特質に関するヴェブレンの理解は，前にも述べたように，マルクスの理解とは多少ともずれている。彼は「資本主義体制のもとでは，生産は，市場において獲得される価格を目標とするところの商品生産，すなわち販売可能な財貨の生産である。この体制のもとでのあらゆる産業がそれに依拠する大きな事実は，販売可能な財貨の価格である」とかいているが，これは価値よりも価格を重視する立場であり，資本主義の特質を営利主義と混同する考え方である。この点はヴェブレンがマルクスと異る根本的な点であるけれども，しかし彼がマルクス並びにカウツキー，ベルンシュタインその他いわゆる「マルクス追随者」の思想について深い造詣をもっており，社会主義経済学の研究において，アメリカにおける先駆者のひとりであったことは疑いの余地がない。スウィージーが，この論文について「それは，マルクス主義文献に関し合衆国の彼

7) *The Place of Science in Modern Civilisation*, 1919, pp. 436—7.
8) *Ibid.*, p. 426.

の同時代のひとの誰よりもはるかに先んじた知識を示しており，全く比較の基礎がない位である[9)]」と言っているのは決していいすぎではない。

3　ヴェブレンの社会主義的世界観

厳密にいえばヴェブレンの考え方は，若干の基本的な点でマルクス主義とは異っているけれども，もしもマルクス主義を，その政治的含意を含めて広く解釈するならば，われわれはヴェブレンのその後の諸著作の中に，いろいろな形でマルクス主義に相通ずる思想が表われているのをみることができる。中でも，1918年「実業家によって経営される大学」の世界を去って比較的自由な立場に立った以後のヴェブレンの著作には，可なり急進的な社会主義思想が表われている。

Monthly Review の編集者——おそらくポール・スウィージー——はヴェブレンとマルクスとの共通点として次の3つをあげている[10)]。

(1) ヴェブレンは1891年の最初の経済学論文からその生涯の終りに至るまで，資本主義の害悪に対する非難を，まさに「不在所有制」(absentee-ownership) においたが，それはマルクスの「資本」と同じものであった。

(2) ヴェブレンは資本主義を嫌忌したのみでなく，それはそれ自身の中にその没落の萠芽をもっていることを確信していた。また彼は，資本主義の制度的基礎，すなわち生産手段の私有制を維持したままでその体制の根本的改革を行ないうると信じているものに対しては，軽蔑以外を示さなかった。

(3) ヴェブレンは終始一貫的なまた非妥協的な国際主義者，もしくはより正確にいえば，反国家主義者 (anti-nationalist) であった。彼は，資本主義が困難に陥る場合にいつでもそれが頼るのは「国家的政治」(national politics)，すなわち国内においては愛国主義の鼓吹と，弾圧，国外においては軍国主義と帝国主義であることを知っており，またそれを主張した。

もしもわれわれがそのような「共通点」をヴェブレンの著作の中に求めようとするならば，それは至るところに見出される。

生産手段の私的占有者としての「不在所有者」もしくは資本家については，ヴェブレンはこうかいている。「このような技術的知識の体系，産業技能の状態は……その保存，行使，増大，伝達に関するかぎり，社会の共同所有である。しかしある特殊の状況のもとにおいては，その所有権と用益権は，比較的少数のものに効果的に預托されるようになる。……社会の物的資源の所有者——すなわち産業的事業への投資者——は結局，社会の技術的知識や能率の共同のストックを『把握し，所有する』ようになる[11)]。」

資本主義体制の過渡的性質については，ヴェブレンは「営利的企業の十分な支配は必然的に過渡的 (transitory) な支配であるということができよう。それは，この2つの文化的傾向のいずれのものが勝利を占めても結局は失われる運命にある。何となれば，それは，いずれのものの興隆とも両立しないからである[12)]」と書いている。この場合，「2つの文化的傾向」というのは，(1) 合理的人本主義 (rational humanitarianism) ——その発展は，機械的産業の自然的解放，財産，利潤，特権のない無階級社会に至るもの——と (2) 軍国主義，ショウヴィニズム，帝国主義との2つであるが，ヴェブレンの見解によると，営利的企業は，このいずれのものとも両立しないものと考えられる。

ヴェブレンが国家主義や軍国主義に強く反対し，国際主義，平和主義の立場に立っていたことは，例えば，ケインズの『平和の経済的帰結』に対する書評の中にはっきりと示されている。彼は，ヴェルサイユ条約の本質を鋭く指摘して次のようにいう[13)]。「過去数ケ月の出来事は，条約の中心的で最も拘束的な規定はそれによって列強政府がソヴィエト・ロシアの制圧のために提携する記録さ

9) P. Sweezy, "The Influence of Marxian Economics on American Thought and Practice", Donald D. Egbert, *Socialism and American Life*, Vol. 1., 1952. p. 473.

10) *Monthly Review*, July—August, 1957, p. 72.

11) *The Vested Interests and the Common Man*, 1919, p. 57.

12) *The Theory of Business Enterprise*, 1904. p. 400.

13) *Essays in our Changing Order*, 1934, p. 464.

れない条項であることを教えている。……このような公認されていない申し合せを別にしては，条約の中には安定と拘束力の性質があるものは何もないようにみえる。このような，ソヴィエト・ロシアを弱化させるための協定は条約の条文にはかき込まれなかった。それは，むしろ，その上に条文がかかれた羊皮紙であったといえるかもしれない。このような，最初から秘密会議の前に置かれた，ボルシェヴィズムを制圧するという困難ではあるが至上命令的な任務は，秘密条約から期待される帰結についてのケインズ氏の分析には全くはいっていない。」ヴェブレンがロシア革命に対して同情的であり，ヴェルサイユ体制をもって，資本主義諸国による反共勢力の結合とみなしていたことは疑いの余地がない。

ヴェブレンの anti-nationalism のひとつの表現として，彼がすでに 1917 年の頃，ドイツと日本との帝国主義の擡頭を予見し，危惧していたことを指摘しておくことも興味があろう。彼は言った[14]。「この 2 つの強国〔ドイツと日本〕のこのような帝国的企図は，平和の機会と，その上になんらかの平和計画を描くべき条件とに関連をもつ重要な状況とみるべきものである。明らかに，これらの 2 つの帝国が存在する以上，いかなる平和条約も不確かなものとなるだろう。いかなる約束も，ある王朝的な政治家を拘束して，……王朝的企図をすすめないようにするものではない。そこで問題が起る。ドイツと日本の野心の地平線の中で，いかにすれば平和を維持することができるか。」

4　ヴェブレンの思想史的地位

しかし，このように，ヴェブレンの立場とマルクス主義の世界観との間にいくつかの点で共通点があるからと言って，ヴェブレンをマルクス主義者とみることはもちろんできない。いわんや，ヴェブレンは，すでに明らかにしたように，その歴史哲学において，資本主義の本質のつかみ方において，真の意味のマルクス主義者とは決定的に異っていた。*Monthly Review* の編集者もいっているように，「その違いはあまりにも明白であり，あまりにも大きく，またあまりにも執拗であって，単に第二義的に重要なものとは考えることができない[15]」のである。

しかしながら，さればといって，一部のマルクス主義者のように，ヴェブレンの立場を，Proudhon, Henry George, Silvio Gesell, Alfred Rosenburg, Major Douglas のような小ブルジョア的社会改良主義とみることも当をえたものではなかろう。また，ヴェブレンを単なる技術的社会改良主義者と考え，テクノクラシー運動の生駆者とみる (Steuart Chase) ことも正しくないし，彼をニュー・ディール哲学の源流とみる (Max Lerner) ことも一面的である。さらに，ヴェブレンを，John R. Commons, Wesley C. Mitchell, John M. Clark などに連なる制度学派 (institutionalism) の創始者と考えることも，ヴェブレンの本質をつかむものではない。いわんや，ヴェブレンの独特な terminology や aphorism の中に Veblenism の特質をみいだそうとするものや，David Riesman や Lewis Feuer のように，ヴェブレンをもって，世に容れられない孤独の魂，偏奇狷介な思想の持主とみるものなどは，到底ヴェブレンの思想の本質に迫まることはできない。

ヴェブレンはマルクス主義者ではなかったけれども，マルクス主義によって多くの影響をうけ，しかも独自の概念と理論とをもってアメリカ資本主義の本質や国際的政治経済情勢を鋭く分析し洞察した社会主義的思想家であった。そのような彼独特の概念と理論が，少くともその当時のアメリカ社会の現実を把握する上に見事な能力を示したことは興味あることといわねばならない。

14)　*An Inquiry into the Nature of Peace and the Terms of its Perpetuation*, 1917. Max Lerner, ed., *The Portable Veblen*, 1950, p. 599.

15)　*Monthly Review*, July—August, 1957, p. 72.